第3問 次の文章は『落窪物語』の一節である。中納言の姫君(落窪の君)は、実母が亡くなり、父中納言に引き取られたが、継母から嫌われ、床の落ちくぼんだ部屋に住まわせられていた。その姫君のもとに中将が通いはじめ、やがて姫君は中将邸に妻として引き取られて、幸福な生活を送っていた。ところが、中将と右大臣家の姫君との縁談が持ちあがり、中将はその縁談を断ったにもかかわらず、中将の乳母が勝手に話を進めてしまった。以下の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

御乳母出で来て言ふやう、

「かの右の大殿(注1)のことは、のたまひしやうに a(注2)ものし侍りしに、『わざとやむごとなき妻にものし給はざなり。時々通ひてものし給へかし。殿(注3)に聞こえて、四月となむ思ふ』と b いそがせ給ふなり。さる心し給へ」と聞こゆれば、c いと恥づかしげに笑みて、

A「なでふ、男の否と思ふことを、強ひてするやうかはある。世の人に似ず、よき身にもあらねば、さのたまふ人もあらじ。(ア)かかることなまねび給ひそ。(注4)かたはなり。わざとの妻にもあらざなりとは、いかで知り給ふ。(注5)いとさ言ふばかりなき人にもあらぬを」とのたまへば、乳母、

「(イ)あなわりな。(注6)大殿も、しかと思し立ちて、いそぎ給ふものをば。よし、御覧ぜよ。やむごとなき人の強ひてのたまはむことをば、いかがはせさせ給はむ。何かは。君達は、はなやかに御妻方(注7)のさしあひて d もてかしづき給ふこそ今めかしけれ。思ほす人ありとても、それをばさるものにて、御文など奉り給へ。かの君も思ふ時は、上達部(注8)の女にはあなれど、落窪の君とつけられて、中の劣りにて、うち(注9)はめられてありけるものを、かく類なく e 思しかしづくこそあやしけれ。人は、かたへは父母ゐたちてかしづかるるこそ心にくけれ」と言ふに、中将面うち赤めて、

「古めかしき心なればにやあらむ、今めかしく好もしきことも欲しからず、おぼえも欲しからず、父母具したらむをともおぼえず。落窪にもあれ、上り窪にもあれ、忘れじと思はむをば、いかがはせむ。人の言はむも多く、そこにさへ B かくのたまふこそ心憂けれ。ただ御為(注10)に志なきに思すとも、今かれもつかうまつるやうありなむ」とて、いと頼もしげなるけしきにて立ち給ふ

めるを、(注11)帯刀(たちはき)つくづくと聞きて、C爪弾(つまはじき)をはたはたとして、

「なでふ、かかること申し給ふ。君(注12)と申しながらも、(ウ)恥づかしげにおはすとは見奉らずや。ただ今の御仲は、人放ちげ(注13)にもあらぬものを。かののたまひつるやうに、志たがはず、はなやかなる(注14)方にやり奉りて、御徳見むと思したるか。あな心憂。少しよろしき人の、さる心持たるやはある。なでふ御名(注15)だての落窪ぞ。老いひがみ給ひにけり。これをかのあたりに聞き給ひて、いかが思すべき。今よりかかることのたまふな。君の思したることいと恥づかしくいとほし」と言ふ。

(注)

1 右の大殿のこと――中将と右大臣家の姫君との結婚話を指す。

2 ものし――ここでは、縁談を断る、の意。

3 殿――中将の父、大将。

4 かたはなり――不都合だ。

5 いとさ言ふばかりなき人にもあらぬを――落窪の君はれっきとした妻になる身分ではない方だ、とは言い切れないのに。

6 大殿――中将の父、大将。

7 御妻方のさしあひて――妻の実家の後ろだてが加わって。

8 かの君も思ふ時は――落窪の君のことを考えてみるに。

9 うちはめられて――自由を奪われて。

10 ただ御為に志なきに思すとも、今かれもつかうまつるやうありなむ――落窪の君があなたに何も尽くしていないとお思いになるでしょうが、そのうちお尽くし申し上げることもあるでしょう。

11 帯刀――惟成。乳母の子で中将の従者。

12 君――養い君。中将を指す。

13 人放ちげにもあらぬものを――他人がひきはなすことができそうもないのに。

14 はなやかなる方にやり奉りて、御徳見む――勢力のある右大臣の姫君と結婚させ申し上げて、恩恵にあずかろう。

15 御名だての――人聞きの悪い。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 20 ～ 22 。

(ア)　かかることなまねび給ひそ　20

① このようなことは心におかけなさいますな
② このようなことを心におかけになるとよいでしょう
③ このようなことはそっくり取り次いでおっしゃいますな
④ このようなことはまねなさいますな
⑤ このようなことをまねなさるとよいでしょう

(イ)　あなわりな　21

① まあ仕方がない
② なんと理不尽な
③ とても不可能だ
④ ああすばらしい
⑤ ひどくつらい

(ウ)　恥づかしげに　22

① 立派な様子で
② 恥さらしな様子で
③ 気がひける様子で
④ 面目なさそうに
⑤ きまりが悪そうに

問2　波線部a～eのうち、主語の同じものが二つある。その組合せとして適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23 。

① a「ものし侍りしに」と b「いそがせ給ふなり」
② a「ものし侍りしに」と d「もてかしづき給ふこそ」
③ b「いそがせ給ふなり」と c「いと恥づかしげに笑みて」
④ c「いと恥づかしげに笑みて」と e「思しかしづくこそ」
⑤ d「もてかしづき給ふこそ」と e「思しかしづくこそ」

問3　傍線部A「なでふ、男の否と思ふことを、強ひてするやうかはある」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

① どうして、男がいったんいやだと思った縁談を、すすんで受け入れることがあろうか。
② 何ということだ、男が恥と思っているのに、身分違いの結婚を強いるなんて理不尽ではないか。
③ どうして、男の気のすすまない縁談を、意に背いて強引にすすめる必要があるのか。
④ 何ということだ、男の反対を逆手にとって、無理に破談に持ち込むなんてひどいではないか。
⑤ どうして、男というものは、条件のいい配偶者をかたくなに拒否するのか、理解できないことだ。

問4 傍線部B「かくのたまふ」の内容の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

① 右大臣が、中将にとって身近な存在である乳母を取りこみ、乳母を介して自分の娘との結婚話を持ちこんだこと。
② 右大臣が、中将の父大将との政治的な取引や中将の将来の出世を絡めて、強引に自分の娘との結婚を促したこと。
③ 右大臣が、落窪の君の存在などとるに足らないと無視して、乳母の意向を汲んで自分の娘との結婚話を進めたこと。
④ 乳母が、両親に大切に育てられ、しかも実家の経済的支援が期待できる右大臣の姫君との結婚を勧めたこと。
⑤ 乳母が、打算的な考えから、中将の意向を無視して、右大臣の姫君との結婚と、落窪の君との離縁を勧めたこと。
⑥ 乳母が、落窪の君の素姓や以前のみじめな境遇に触れ、中将の正妻としてふさわしくないと、離縁を促したこと。

問5 傍線部C「爪弾をはたはたとして」には帯刀のどのような心情が示されているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

① 自分の母である乳母の意見に従おうとしない中将のかたくなさに不快感を抱いている。
② 自分の母である乳母が中将の気持ちを無視して話を進めようとしているのに対して腹立たしさを感じている。
③ 自分の母である乳母の考えは古風だと感じ、同世代である中将の当世風の考え方にむしろ共感を覚えている。
④ 自分の母である乳母の立場もあるが、仕えている中将への義理も果たさなければならず、思い悩んでいる。
⑤ 自分の母である乳母の当世風の考え方も、中将の古風な考え方も、どちらにも一理あると思っている。
⑥ 自分の母である乳母の方が、若い中将よりもかえって当世風の割り切り方をしているのに驚いている。

問6　乳母と中将の結婚に対する考え方の食い違いを説明するものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

① 乳母が愛情の深い妻のほかに経済力のある妻を持つべきだと主張したのに対して、中将は落窪の君も経済力を備えていると強調した。

② 乳母が実家の後ろ盾のない落窪の君とはきっぱりと別れて自分の勧める姫君と結婚するほうが出世できると主張したのに対して、中将は落窪の君への愛情が出世よりも重要だと主張した。

③ 乳母が権門の姫君との結婚がもたらす経済的な利益を強調したのに対して、中将は落窪の君も権門の姫君であることを主張し、落窪の君との結婚を正当化した。

④ 乳母が貴族の子弟は身分の高い妻をたくさん持つべきだと主張したのに対して、中将は自分が多くの妻を持てるほど身分が高くないので一人の妻しか持てないと反論した。

⑤ 乳母が貴族の子弟は親の勧める相手と結婚すべきだと主張したのに対して、中将は落窪の君との結婚は親の了承を得た正式なものであると反論した。

⑥ 乳母が貴族の子弟は妻の父母の援助を受けて大事にされるのがよいと主張したのに対して、中将は妻に対する愛情こそが重要だと主張した。

通釈

中将の乳母がやって来て言うには、

「例の右大臣家との御縁談は、（あなたの）おっしゃったように断りのお返事をいたしましたが、（右大臣家では）『（落窪の君は）格別に身分の高い正妻ではいらっしゃらないそうだ。（それならその女君のもとには）時々通うことになさいませよ（そして私どもの姫とは正式に結婚して下さい）。お父上にも申し上げて、四月に（婚礼を）と思っている』と準備を進めていらっしゃるそうです。（ですから）どうぞそのおつもりでいらっしゃってください」と申し上げると、（中将は）大そう立派な様子で笑みを浮かべて、「どうして、男の気のすすまない縁談を、意に背いて強引にすすめる必要があるのか。私は世間の人にも似ず変人で、高貴な身分でもないから、私を婿になどとおっしゃる方もいないだろう。このようなことはそっくり取り次いでおっしゃいますな。不都合だ。（それに）格別に身分の高い正妻ではなかろうなどと、どうしておわかりになるのか。（落窪の君は）れっきとした妻になる身分ではない方だ、とは言い切れないのに」とおっしゃると、乳母は、

「なんて理不尽なことを。あなたの父上も、そうしようとお思いになって、準備していらっしゃることであるのに。まあ、御覧あそばせ。高貴な人があえておっしゃるようなことを、（あなたは）どうなさることができましょう。何も迷うことはありません。貴公子というものは、はなばなしく奥様のご実家の後ろだてが加わって（婿殿を）大切にお世話なさるというのが当世風なのです。（ですから、今）愛していらっしゃる方があっても、それはそれで割り切って、（右大臣の姫君にも）お手紙など差し上げなさいませ。その女君のことだって考えてみれば、上達部の娘ではあるそうですが、落窪の君と呼ばれて、姉妹じゅう一番の不出来な娘として、（落窪の間に閉じこめられて）自由を奪われていたのに、（そんな人を）こんなにまで例のないほど大切に扱っていらっしゃるのが私にはよくわかりません。女は、一方では両親が熱心に何かと世話をして大切に扱われるのが奥ゆかしいのですよ」と言うと、中将は（気を悪く

して）顔面を紅潮させ、

「私は古風な考えの人間のせいか、当世風で感じのよいこと（＝妻の実家で大事にされること）も望まないし、世間の信望もいらないし、両親健在の人を妻にとも考えていない。落窪だろうが、上り窪だろうが、見捨てはするまいと思う女を、どうしようというのか。世間の人はいろいろ取り沙汰しているけれど、あなたまでがそんなふうにおっしゃるとは情けない。（落窪の君が）今はあなたに何も尽くしていないとお思いでも、そのうち彼女もお尽くし申し上げることだってあるだろう」と、大そう頼りになるようなご様子でその場をお立ちになるらしいのを、帯刀は（一部始終を）じっと聞いていて、ぱちんぱちんと爪弾きをして（母である乳母に向かって）、

「（母上は）いったいなぜ、そんなことを申し上げなさるのですか。養い君と申し上げて（親しくお仕えして）いるといっても、（中将が）ご立派な態度でいらっしゃるとは拝察しないのですか。今のお二人の御仲は、他人が引き離せるようなものでもありませんのに。（それでも）中将殿がおっしゃったように、母上の思い通りに、勢力のある右大臣の姫君と（中将を）結婚させ申し上げて、何らかの恩恵にあずかろうとお考えなのですか。ああ情けない。ちょっとまともな人間で、そんな考えをもつ者があろうか（いや、いるはずがない）。（それに）落窪とは何と人聞きの悪いお名前でしょう。母上は年をとって根性が曲がってしまわれたのです。こんなことをあの女君がお聞きになったら、どうお思いになるでしょうか。これからはこんなことは一切おっしゃいますな。中将殿のお考えになっていることは本当にご立派で中将殿がお気の毒です」と言う。

問題番号（配点）	設問	解答番号	正解	配点
第3問（50）	問1	20	③	5
		21	②	5
		22	①	5
	問2	23	④	7
	問3	24	③	6
	問4	25	④	7
	問5	26	②	7
	問6	27	⑥	8